

文化運動としての建築

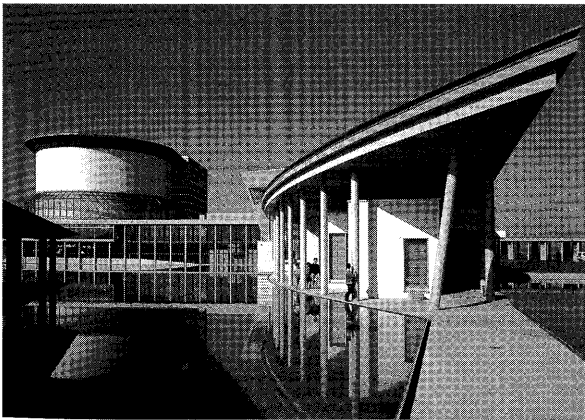
■ 新居 千秋氏（建築家）との議論から

運営プログラムづくりから始まる建築 ～黒部市国際文化センターの場合

日本における建築設計の発注の仕方で良くないのは、基本計画の段階でコンペをしないで、プログラムがすべて出来上がってから建築家を選んでいるということだ。そこで私は、黒部市国際文化センター*1の設計を指名されたとき、住民や役所の意見を聞かないと設計ができないと市長に訴えて、プログラムを一旦白紙に戻してもらった*2。

そこからプログラム作りが始まったわけだが、東京では文化人にインタビューをしていった。一方で、黒部の地元では市民による「運営企画会議」を開いて、地元の人たちと一年間ぐらいかけて打ち合わせして、プログラムを組んでいくという方法をとった。

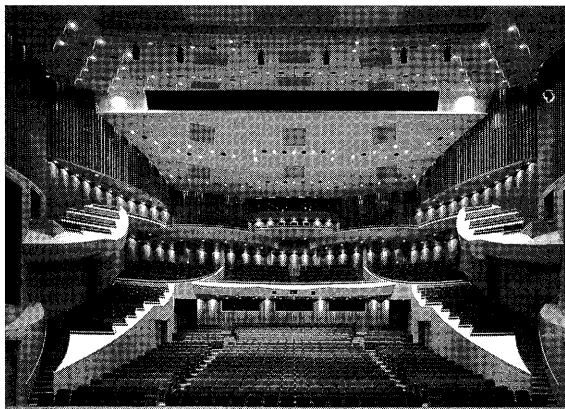
地方に一流の公演を呼ぶために、開館2年前から進行計画表を作ってアーティストとの交渉を進めたり、ボランティアをどう育てるかといったことを細かくチェックしていった。毎月2回くらい市長とか運営企画会議のメンバーと運営について討議を重ねたと思う。



レストランができるかどうか最後まで問題だったが、レストラン経営者の選定もコンペにして、熱意のある人を選んだところ、いまはとても繁盛しているということだ。

写真上：黒部市国際文化センター
古館克明氏撮影

写真右：黒部市国際文化センター
大ホール
古館克明氏撮影



*1 資料編参照

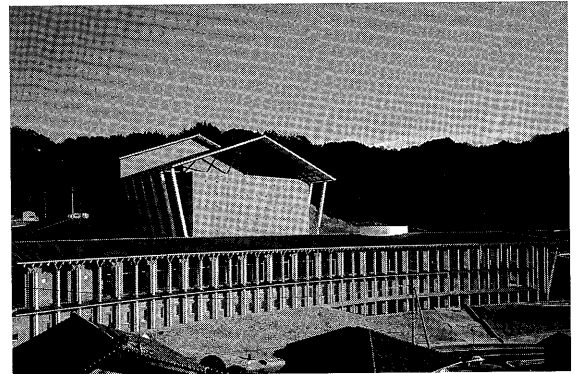
*2 黒部市は市制40周年を記念して黒部市国際文化センターの建設を計画し、5者の指名プロポーザルの中から新居氏が設計者に選定された。

*3 資料編参照

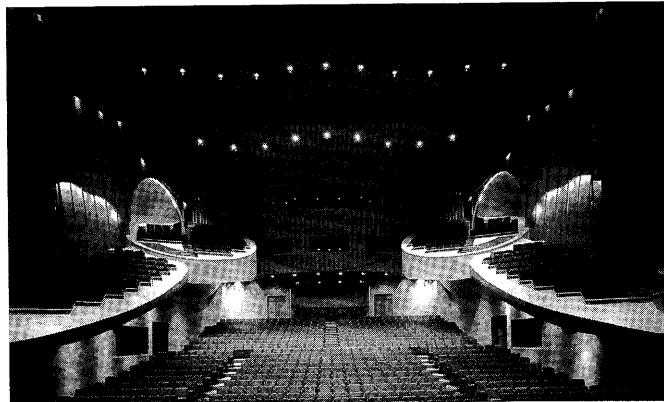
複合的機能を持たせる ～悠邑ふるさと会館の場合

悠邑ふるさと会館*3は、人口5,000人くらいの町が7つ集まって設立した総合事務組合が建設したもので、リーディングプロジェクトや若者定住促進事業などの事業でつくった複合文化施設である。通常のホール等をつくることはもちろんだが、地域のさまざまなニーズに応える観点から、たとえばリハーサル室では結婚披露宴もできるように、民間の結婚式場を調査して、部屋の面積を披露宴会場の面積に合わせた。また、地方に居ながらにして六本木や原宿にいる雰囲気を経験できるようにと、集会場はディスコもできる施設にするため、照明器具まで凝るなどしている。

悠邑ふるさと会館に続く第2期工事として、サウンドミュージアムという博物館を計画している。当初、博物館、スーパーマーケット、ホテル、プールなど大規模な計画がなされていたが、ホテルをやめて、宿泊施設やプールなどを博物館の中に取り込み、規模を縮小する案が採用された。この地方で余っている古いレコードを集めて廊下に陳列して、廊下をギャラリーとして利用できるようにしている。あとは、プールやレストラン、レコーディングスタジオなどを入れるようにした。最上階に宿泊室があり、中間の仕切をとると大部屋になってプラスバンドの人たちが雑魚寝ができるようになっている。また、プールに



悠邑ふるさと会館
古館克明氏撮影



悠邑ふるさと会館
大ホール
古館克明氏撮影

は水中照明を設置しており、明かりを入れるとリゾートホテルの感じにもなる。

住民がどのような施設を望むのか聞いてみると、45歳を境に意見が分かれる。45歳より上の年代の人は、地域の目玉になるような高価な施設で外から客を集めようと考えているが、若い人たちはそれより自分たちの生活を楽しまたいという希望が強い。私としては若い人の意見を大事にしたいと思っている。

継続的な地域の活性化をはかる ～国東ニュートピア基本構想計画*4

大分県ではいくつかの核となる地域があるが、それぞれに50億円を投下して地域の活性化をはかるというシミュレーションをここ2、3年やっている。私たちは国東の町でそれを行った。通常大きな建物では地域の建設会社は潤わないが、50億円をいくつかに分割して、7億円の公営住宅を3期か4期に分けて建設し、庁舎を13億かけて、それから漁港を整備し、という具合にしていくと、計算では大体20年ぐらい地域で仕事が動くことになる。大きな施設をつくってマニアの人しか行かないということになるより、いろいろな人たちが永続的な形でかわれるほうが、地域が活性化する。

仕事はふたつの方法で行われた。ひとつは、過疎地域アミニティタウン構想*5という大分県のレポートを受けて、国東以外の地域に関してどのくらいポテンシャルがあるかを分析し、ほかの町とバッティングしないようなものを国東に持ってきて、それをもう一度ばらして組み立てるという方法。もうひとつは、地元の人と町を歩き回って、ここはこうだ、あそこはどうだという形で地元の人とコンセンサスを取りながら進めていくという方法を同時並行で進めていった。

気をつけたのは、なるべくネットワークをすること、最低限バッティングは避けることを念頭におきながら、予算をだぶらせないように、また面積をあまり広げないようなるべく施設を集中させる形をとるということ。

フリートーク

新居先生のように地域の側にたって懇切丁寧に仕事をしていただける人がほかにもいるのか、またそういう人と出会うために何がネックになっているのでしょうか。

*4 過疎地域アミニティタウン構想を受けて、過疎からの脱却、地域の活性化を図るため、国東町が長期的な視野にたって平成5年度に策定した構想。

*5 優れた自然環境及び居住空間を生かし、地域の適正人口に見合う景観・空間計画を実施することにより、規模拡大や乱開発から地域を守ることを目的に、大分県が平成2～3年度に策定した過疎対策構想。

私のまわりにも5～6名、ほかにもできる可能性のある人たちで機会の与えられていない人たちがいると思います。

日本の教育では町をどうつくるのかといったことが行われていないですね。大学に都市計画という学問はあるんですが、文科系と理科系をつなぐような分野がない。ちょっと時間はかかりますが、小中学校で文化活動をしていくときの考え方を変えていくことは大切ですね。

単純に地方にまかせればいいものができるのでしょうか。

発注する側の信念が大切だと思います。学芸員とかマネジメントをしていく若い人をどう育成するかということではないでしょうか。

そういう人が育っていない地域には、国が学芸員やアドバイザーを派遣することも考えられます。

黒部市国際文化センターを見学して感心したのは、備品の隅々まで注意がゆきとどいているということなんですが、工事費と備品購入費は会計科目が異なるので建築家の方が備品まで面倒を見るというのは難しいと思うのですが。

きれいになったほうがいいと思うんですよ、単純に。人に笑われたくないというか。備品というのはハードとソフトの中間領域で、利用の仕方が具体的になっていけばいくほど要望も出てくる。大きな項目になればハードのほうも変えていく必要も生じる。設計が終わったときに一緒に備品のリストもできているという形が理想だと思うんですが、工事監理を行いながら直していくということも必要だと考えています。

●新居千秋

1948年 島根県生まれ

1971年 武蔵工業大学工学部建築学科卒業

1972年 ペンシルバニア大学大学院修了

1973年 ルイス・カーン建築事務所入所

1974年～75年 G.L.C. (ロンドン市チームズミード都市計画特別局)

1980年 新居千秋都市建築設計設立

●主な作品

「水戸市立西部図書館 (GIRO)」(1992年)

「世田谷区立下馬南地区会館」(1993年)

「SWAN HOUSE (大館市市営水門前住宅)」(1994年)

「黒部市国際文化センター」(1995年)